

総合討論

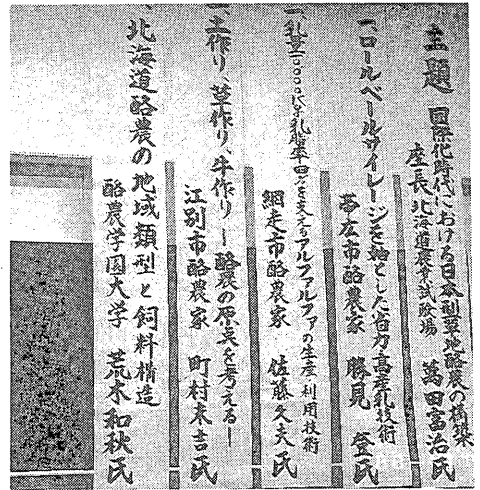
(萬田座長) これからの総合討論に入りますけども、お手元に配りました質問用紙を類別しまして能率的に進めようと思います。それでは、早急に回収していただきまして、その間に一人、一人についてご質問がありましたら、受けたいと思います。

まず、勝見さんの報告に対しまして、何かご質問がございましたら。

どうぞ。

(質問者) ロールベールサイレージについて、お聞きしたいんですが、春先に収穫した草は次の年までカビを発生させないで食べられるものでしょうか。ぼくの場合は、どうしても冬越せないんです。特にパックにするんでね。太陽の当たった反対側に白カビが発生するんです。それで、どうしてもロールバックサイレージっていうのは2カ月か3カ月でしか使えないもんかなと思っていました。しかし今日のお話しでは、どうもそうでないみたいなので、そこらへんの秘訣をお願いしたいんです。

(勝見氏) 僕もパックを使ってる時はほとんど失敗しました。というのはビニールが一重であることと、それからパックとサイレージの直径が合わなくて、ビニールがダブついてるっていうかな、風が吹くとパサパサするのと、風で緩んだ時にビニールが垂れて、垂れた所にネズミが入りやすいという感じだと思うんです。それで、パックの種類にもよるんですね。薄いビニールのもあれば、堅いのもあるし、色違いもあるし、それによって紐の縛り口から入るとか、あと、太陽の向かっていうのはあんまり分かんないんです。けども、僕の場合は先程いったように、パックの失敗を過去にして、ワンシートで成功して楽だということでパックにして失敗して、また今年ワンシート方式にもどったっていうんですけども、それはビニールが全部二重なんです。それで、長いビニール1本52mから53mあるんですが、それ切ってたみなおして全部二重にしてワンシートっていう方式でやるんです。けどもそうすればビシッとして風にも大丈夫だし、それからビニールも弛まないで、ネズミにも大丈夫です。ビニールがビシッとしてればネズミは多分来ないはずですよ。ビニールが余ってきて弛るんのような状態だとその陰になんかネズミが来るような気がするんですがね。地域にもよるかもしれませんが、うちでは余り害はありません。それから、越



冬の関係なんですけども、二重になってるビニールが、その上のビニールが冬はパリパリで触ったらパリッとすぐ破れますけども、二枚目のビニールはまだピシッとしてますので、冬でも大丈夫です。それから、去年も一昨年もそうですけども、大体一年中大丈夫です。

(質問者)一年以上大丈夫ということは、6月に収穫した草を次ぎの年の6月頃食べさせても大丈夫ということですか？



萬田座長

(勝見氏) 僕のところでは、大丈夫です。そうですね、在庫できた場合8月頃までであったこともあるんです。それはビニールが二重であることと、他の物に穴を空けられないことと、高水分低水分であっても水抜きが完璧であるっていうことだと思えます。

(質問者) 白カビは発生しないんですか。

(勝見氏) ワンシートになってから一つありません。

(質問者) そうですか。どうもありがとうございました。

(萬田座長) その間に質問の集計できましたので、まず、勝見さんへきている質問について、私からおたずねしますが、問答でいきたいと思えます。

いまのロールベールサイレージの件について、サイズですね。ワンスタックの個数は何個か、という質問です。

(勝見氏) はい、ワンスタックの、

(萬田座長) 一つのビニールの中に幾つ入ってるかと、

(勝見氏) とりあえずは、今のところ5個ですけども、先程いったようにビニールが50mから53mで、それを二重折りに使いますから、例えば、うちの場合5個取って、最後に半端がでます。半端を半分に折れば、2個か3個、あるいは半端ともう一本の半端を張り合わせれば6個から7個はいります。そういう使い方です。

(萬田座長) これは、質問の方の名前を読み上げてやった方がいいんですか。そうですか。それじゃ、ちょっと重複してるともありませんけども、次の質問は最初に質問された宗谷南部地区農業改良普及所の高村和俊さんの質問と非常に似てますが、これの中で抜けてるところは、育成牛のサイレージ給与は何カ月ぐらいから初めていますか、という質問です。

(勝見氏) 育成牛、早い牛もいますが、先程のスライドの中にありましたけれども、あのスーパーハッチ(古い小屋を改造したもの)、あるいは大型育成牛舎の小さい



勝見登氏

群ですから、大体スーパーハッチの後半の月例ですから、生後5、6カ月ぐらいの牛には低水分サイレーズを給与しています。

(萬田座長) それからですね。根釧農試の能代さんからは、勝見さんの話しの中で、アルファアルファの維持が困難で、いろいろ試験的にやって来たけども、いまは面積を縮小してるといわれましたが、その理由は4回刈りが多いのではないかと、町村さんのように二年目(利用一年目)は2回刈りとか、アルファアルファの根っこを考えて利用する配慮が必要ではないかと、というご質問とご意見ですけども、その辺はどうでしょうか。

(勝見氏) 4回刈りっていうか、うちの場合、大きくなるとべたっと倒れてしまうんですね。それで、十勝の場合は天候も偏りぎみなんですけど、天気がよくなれば、良い草をとりたいて、どうしても刈りたくなってしまいますね。早く刈れば、次の草が早く伸びてきますので、最終的には3回ないし4回になってしまうということで、刈り取る回数が多いのかもしれない。作ってる者からみれば畑に立って、天気がよければ良いものを立ってるうちに採りたい気持ちにもなりますし、地域にもよるかなっていう気もしますが、自分の畑、牧草作りはまだまだかなって、自分なりに反省してるっていう気持ちです。

(萬田座長) それから、多くの質問をいちいち問答やってたら、かなり時間かかるので、私が読んでですね。かなりの独断でちょっと解答することもあります。

さて、次の一つは、勝見さんは、ロールベールサイレーズだから高乳量を得たのか、そうじゃなくて良いサイレージであれば、ハーベスターで切ろうか、どういうサイロで作ろうか、高乳量は得られるんじゃないか、という質問です。

正にその通りで、勝見さんが報告した趣旨は、ロールベールサイレーズという省力、手間をかけないで高泌乳を実現しているという所がポイントでありますので、省略させていただきます。それから、勝見さんの所へは、配合飼料、どんなものを使ってますか、という質問です。

(勝見氏) 配合飼料っていうと?

(萬田座長) あの泌乳牛に食わしてるエサです。

(勝見氏) 種類ですか。

(萬田座長) はい。

(勝見氏) CP 16のTDNが71の配合飼料と圧ベン大麦ですか、それとビートパルプ、魚粕でCP 69で、少し最近ちょっとそれは試験的なんですけども乳成分の低い牛だけに綿実と大豆過熱圧ベン。これは4頭だけ試験的に、特に乳成分の低い牛だけにやっています。それだけです。

(萬田座長) はい、それじゃとりあえず、勝見さんへの質問を終わらして戴きまして、次に佐藤さんへの質問です。佐藤さんには、アルファアルファを中心に二つ質問がきております。

その一つは、十勝農協連の青谷さんの方から、アルファアルファの栽培のポイントと現在の利用可能年数についてです。

(佐藤氏) ポイント。私は、うちら年3回刈りでございます。4回、先程ちょっとお話ししましたけど、

4回刈りますとやはり次の年に非常に生育が悪いということから3回にしております。

(萬田座長) はい、それからですね。一体、そのアルファアルファサイレージとイネ科サイレージで、両方とも良いステージで刈って嗜好性に差がありますか、という質問です。いい条件で。

(佐藤氏) 僕は、結論からいいますと余りないと思いますが、食べさせて後で牛の状態とか、乳成分に多少影響があるんでないかという気がします。

(萬田座長) その乳成分は特にどの辺りが。

(佐藤氏) 毎月乳検やってみますと、そうですね、チモシーないしオーチャードの多いときには多少脂肪が下がるという気が、え、うちはほとんど濃厚飼料が一定でございますので、そういう数字がちょっと出ますんで、たぶんルーサンの方がいいという感じでやっております。

(萬田座長) はい、それから、総合的にとらえた場合にイネ科牧草とアルファアルファのメリットとデメリットはどこにあるかという、非常に難しい質問ですけども。その佐藤さんの経営の中で結構です。もうやっておられるわけですから、デメリットよりもメリットがあるからやっておられるわけでしょう。いや、難しいですから、これは後程の懇親会の時でもお話していただきまして、

もう一つですね。天北農試の菊池さんの方から、佐藤さんへの質問が参っております。アルファアルファの草地の中身で、単幡と、チモシーとの混幡と、オーチャードグラスとの混幡の、この3種類の圃場を作っているが、その理由はどうしてですか、という質問です。

(佐藤氏) 僕、まだルーサン蒔いて日が浅いわけで、うちのところは非常に起伏が多く、多少水分の多い畑、また冬期間吹きさらしということ、それからその特に雪のたまる所があるわけでございます。そうしたなかで、春になってルーサンが枯れたこともあるわけです。そこで、春になって草が全くなかったということになりますと大変でございますので、そうした関係上今のところ混幡でやっておるんです。これからいろんなことをお聞きしてももう少し単幡にしたいと思っています。

(萬田座長) はい、それから追肥のやり方です。単幡だとか、混幡率、それぞれ違うと思うんですけども、主にどこをポイントにして追肥をしてるか、という質問です。

(佐藤氏) 僕は、最初、春の雪解けのとき、収穫したあとには必ず追肥をしております。それと堆肥が多くとれますので、秋にある程度の圃場には十二分に散布してるということでございます。

(萬田座長) そのですね、おそらくこの質問は、畑で混幡率がそれぞれ違うんですね。例えば、ルーサンの多い畑だとか、少ない畑だとか、草種が違うとか、そういう細かいことに対応しながら、きめ細かく追肥をされてるのか、ということかな、と見たんですが。

(佐藤氏) えーとね、やはり細かくは注意しておりません。ざっぱくにやっております。



佐藤久夫氏

(萬田座長) はい、どうもありがとうございました。それじゃ時間の関係で終わらしていただきまして、次に、町村さんへの質問に移さしていただきたいと思います。町村さんには、技術的な点と、もう一つとかなり大きい質問がまいてます。

まず技術の方からお尋ねします。表6の配合飼料構成の単位はなんですか、という質問です。この単位、

(町村氏) 蛋白と澱粉かというのですか。

(萬田座長) いや、おそらく数字の%だとか、kgだとか。

(町村氏) あっ、どちらもkgです。

(萬田座長) kgですね。

(町村氏) 一回の配合 210 kgのミキサーで攪拌するものですから。

(萬田座長) はい、それから、これは酪農大学の原田先生からの質問で、町村さんの乳成分が高く、非常に成績が良いわけですが、それは何によるのか、乾草とかサイレージの品質が原因ですか、町村さんはどのようにお考えか、と。

(町村氏) 一つはですね。自分の所のハーズサイヤーをずうと専門に使ってきてましたから、私が昭和30, 40年以降、48年, 55年と選んできたりしてますけども、絶えず求めようとするところの牛群のですね。向こうの、そこの牧場の支配人あるいはオーナーの飼養管理をみていて牛群の、やはり乳脂肪の高い牛群から種牝牛の選択をしてきたのが一つの理由になるかとおもいます。それから、もう一つは、私のところでは青草だとか、いわゆる粕類は使ってませんし、本当にもう単純に乾草とサイレージ、それと濃厚飼料っていうやり方によって、意識はしてませんけれども、自分の検定成績はいつもこういう結果がでますんで、私どもではいつも乳脂肪 4%以上という牛乳を出しております。

(萬田座長) はい、どうもありがとうございました。それではお三方にわたる技術的な質問をさせていただきます。それぞれお答えになってください。まず、勝見さんから、ルーサンの品種は現在何を使っていますか、という質問がきています。

(勝見氏) 2、3年前に蒔いたきりで最近蒔いてないんですけど、確かサイテーションと。

(萬田座長) それから、ソア蒔いてなかった?

(勝見氏) ソアは蒔いてなかったです。

(萬田座長) サイテーションですね。で、勝見さんは、今は縮小されてるわけですが、いろんな理由はあると思うんですが、品種としてはどういう特性をもったものが欲しいですか。これは北農試の山口さんからの質問です。どういう特性の品種を望みますか。

(勝見氏) 僕はルーサンに限らず、どういう品種が欲しいって言えば、極端に言えばね。今のバイオで極端に開発して欲しいんだけど、豆科で高収量で高蛋白高栄養で永続性が高くてっていうのですね。それと、これも極端だけでも、禾本(イネ)科と豆科をかけ合わせたらどうかとか。なんていうか、イモとトマトをかけあわしたら、ポマトっていうのがありますけども、そういう感じの草を作ってもらい

たいなって感じで思っています。

(萬田座長) 大変難しい提案が、ご注文がありました。佐藤さん、同じ質問ですが、お願いします。

(佐藤氏) えー、うちのルーサンはソアでなかったかと思います。それから牧草はルーサンと混播できる禾本科の牧草が欲しいと思ってます。組み合わせのできる牧草ね。

(萬田座長) 町村さん、いかがでしょうか。

(町村氏) いままではソアを蒔いてました。今年の秋はですね、ジョーシスっていうのとバータスですか、その二つを蒔いてみました。それからルーサンとしてはですね。やはり茎が細くて葉が落ちない。乾草のしやすいルーサンができてくれたら非常によろしいんじゃないかと思って期待してます。

(萬田座長) どうもありがとうございました。それからあと、品種問題で同じような質問が北見農試の中住さんからでております。

一般的な牧草の品種問題についてほとんど話しがなかったのですが、どうでしょうか、これは、かなりいろんな方の意見もあると思いますので、後程時間があれば品種問題にも触れていきたいと思いません。

それから、町村さんにもう一つ、事務局長の篠原先生の方から非常に大変大きな質問が参っております、これは最後のとりまとめのところでは取り扱った方が良い質問です。あとにまわします。

次に、荒木先生に対するご質問が二人からきております。ほぼ同様な中身なので要約しますと、具体的に現地の事例調査の中から抽出されて、一定の方向を示されておりますが、もう少しその中身についてのつめなり、提案が欲しいというご質問です。その点はいかがでしょう。

(荒木氏) ちょっと、質問にどういうお答えをしたら良いか、迷ってるんですけども、経営サイドからいきますと、乳量を高めることは一応手段でありまして、最終的な経営成果をいかにあげていくかっていうことが非常に重要になってくるわけですね。で、そういったことからいきますと、中札内あたりのやり方っていうのは非常に優秀なやり方だと思います。ただ、先程も言いましたように、そこにはいろいろと問題点もありまして、労力の問題とか、それから餌の長期確保の問題とか、肉の問題等があるということを先程申しました。ある程度の、村単位、地域単位で態勢が出来ているところでは、濃厚飼料多給の高泌乳酪農も存在してはよいのではないかと思います。

しかし、十勝の他の地域を見ますと、こういう経営の、いってみれば高泌乳牛をやって頭数規模を拡大し、経営の枠を非常に高める格好になるわけですね。そして、購入飼料の部分が非常に高くなることは、それだけ経営に対する危険性も増大していくわけですね。

それで、先程申しました稚内の事例はできるだけ購入飼料を抑えていこうということで、季節分婉を行い、冬場の購入飼料を抑えていき、できるだけその経営の規模を、経営のサイズを大きくしない格好で、経営の質を高めていくというやり方ですね。すなわち自給部分の質を高め高度利用することによって経営成果を高めていこうっていういうやり方なわけです。それは、今日報告された勝見さんにしても、佐藤さんにしても、町村さんにしても、共通して言えるんじゃないかと思います。

で、北海道の酪農は、今まで、特に釧根は典型的なんですけども、量的な拡大であったわけです。けれども、とかく量的な拡大というのが所得の拡大というふうに関連して取られ易いんですね。そうでなくて、これからはむしろ質的な面に、重きをおいた経営をやっていくべきじゃないか、そういう面で今日報告された方が、典型的な事例になるんじゃないかと思っております。ちょっと答えになったかどうかわかりませんが。

(萬田座長) いかがでしょうか。もし今のご発言に対しましてどなたかご意見ございましたら、えーと、今までの、ここは草地研究会ですから、なるべく自給飼料問題に絞って進めていきたいんですけども。

ややもすれば、今までの追求の仕方は、できるだけ収益性を高めるために駄牛を淘汰して高泌乳路線をやろうと。これは北海道全体、そういう方向で動いてきて、実際そういうふうになってきてるわけですね。で、その中身としては、まあてっとり早く、円高のなかで濃厚飼料も安いし、増給すれば泌乳反応で答えてくれます。しかし、それもいろいろやり方を誤ると、疾病も増えて来るし、今、肉値が高いですからどんどん回転して、牛の更新を早くしてやれば、改良も進むし、収益性も良いんじゃないかという考えもあると思うんですが、そういう路線が非常に色濃くできてたわけです。

それに対して良質粗飼料っていうのは、一体何だろうということが、もんもんとして、我々草地にかかる者は悩んでたわけです。けれども、今日のお三方の事例を聞きまして、なるほど高泌乳牛路線を追及すればするほど良質粗飼料は必要であるということを見事に説明、証明される事例がでてきたわけです。これは、今後の方向を展望をする前に、我々としても非常に勇気づけられることですし、今までのでっとりばやい、その私が最初にいいましたように、国際化っていうのは物まねではなくて、北海道の我々の限られた土地資源の中で、最高の生産をやっていくというのが、酪農がその代表ですから、それを追求していく他ないだろうと思います。

ただそういう路線がいままでは、むしろ負債の増加につながってきた。スチールサイロの構築なり、土地取得なり、施設の拡大なり、いろいろのそういうことを、いろんな経営の方が指摘しております。が、そういう反省として、むしろ買い餌で効率的にやっていった方が良いというのが、いま色濃くできてきたと思うんですね。しかし、それでその路線の延長線上に将来が見えてくるかというところが、今非常に大事なことだと思うんです。今の農家経済をみれば、皆さん負債であえいでいます。で、乳価は下がっています。ま、一定程度生産枠は緩んで拡大してきておりますけども、そうはいつでも依然として乳価は下がっていく方向である。と、そうすると勢い安い餌に頼らざるを得ないというのは、もう分かりきってることなんですね。

ですから、ここでは、あまりその辺のいわゆる濃厚飼料多給型か、粗飼料多給型かという論議は止めることにして、これは、ちょっと独断ですが、もう少し、せっかく今日お三方からこういう事例を報告していただいたわけですから、これらを参考にして、北海道の隅々に、それぞれの地域条件、経営条件に合った酪農経営技術を作っていくじゃないか、というふうにもっていきたいんです。そういうこと

で、まとめる方向でのご発言をお願いします。どなたか、ご意見ございましたら。

時間がなくなってきましたから、これですね。一応私の方で、いま4人の方の話題提供を聞いておりました、この方向は行っていいだろうかということをご提案いたします。

一つは技術指導のあり方です。いま、勝見さんなり、佐藤さんの方から、こういう技術をやるときに、周りの流れとズレていった。と、これは一体何を意味してるんだろうか。我々、これだけ技術者、いろんな指導関係者いながら、そのズレを超えて、今、彼らは素晴らしい経営を展開してるわけですが、どうして、そのときに大きなうねりとしての指導体勢なり、方向を示す事ができなかったのか。一つの課題です。勿論、お二人の経営成果を上げる過程でいろんな優秀な指導者の助言が入っています。しかし、その方たちもその当時の先覚者としては、少なかつたと思うんですね。その辺の我々の研究体勢なり、技術指導体勢、これをどう考えたらいいか。これだけ情報処理が発達して農家にはいろんな情報が入っていくわけです。その情報伝達の仕方を適確にまとめるのをどうしたらいいか、これは、普及組織も、いろんな普及所、農協の、現場も、市町村もあるでしょう。その辺のところを、やはり今後の問題として、今日は結論だしませんから、指導体勢のあり方をもう一度考えておく必要があるという教訓ではないかと思えます。それが、物まねをしない技術です。後で反論があったらしていただきたいんですが、

次には購入飼料を減らしながら乳量を増やしたと、お二方が、町村さんの所も将来は、農場を移転するなりしたときには、そういう方向をもっと追求していきたいというお話しもされてますが、これは一つの粗飼料多給型で、しかも収益性の高い経営を実現しておられる。これは大いに推進して良いんじゃないかというふうに思います。

それから、それを支える粗飼料としてグラスサイレーズが登場してきてる。しかも、少し食わせるのではなくて、飽食体勢を確立してること。これは非常に重要なポイントだと思います。我々の、今までの草の利用の仕方、生産については、適品種あるいは施肥、更新等と、いろんな技術がありますが、牛の口に結びつけて、どう利用したらいいかという所がどうも弱かった。で、今の草地利用の路線の先には、私は何も展望はでてこないと思うんです。いわゆる低コスト生産の一つの方向として、反収の向上、いわゆる反収の中身をお三人の方は指摘されたわけです。それは粗飼料ではなくて、もはや耕地や、牧草地で生産される粗飼料は産乳飼料であるといっているわけです。佐藤さんは、粗飼料だけで20kg以下に乳量が落ちたら濃厚飼料を食わせない。粗飼料だけで20kgでいっぱいにする。TDN 65%、CP 18%とか。これは、もう粗飼料ではないですね。60万ヘクタールに及ぶ牧草地が北海道にあります。……それは高泌乳牛の飼料です。

そのことを、3人の方は提案されていると思います。産乳飼料ですから下手に食わせると牛がおかしくなります。産乳飼料といっても違うのは、良質繊維がある程度入ってます。これを胃袋にぎゅうぎゅう押し込んで、十分ルーメン機能を発揮させるというやり方が健康につながるということを説明されたんですね。そういう方法を1つ考えたらどうか。

次に、機械の共同利用をやっておられます。これも低コスト生産の大前提です。これも勿論その通り

です。

それから、従来の路線と違うところは、高泌乳牛はルーメンが中心であること、ルーメン機能を損なわないように良い餌をたくさん給与するということが重要です。そのためには多回給飼、いろんな食わせる餌のルーメンでの分解性を考慮した飼料給与が必要であるということで、多い人は5回も6回も餌を食わしているわけですね。それに対して今日の事例の中では非常に給与回数が少ない。それでも9,000 kg、10,000 kgは健康に搾っている。乳成分も非常に高い経営もある。これも今までの我々の考え方に対して、あるいは海外からの紹介技術に対して、もう一度整理しておく必要があると思います。これが一重に省力管理につながって行くわけです。

高泌乳はやりたいけれども非常に奥さんの労力がかかる。外出もできない。まあ冬は暇だから、牛に張り付いていいんじゃないか。府県のように兼業する機会ないですから俺んところは畜舎張り付いてたくさん搾ということで何回も餌を与える人がいます。まあ、それはそうですけども、先程荒木先生がおっしゃったように、これからは労働時間を短縮する時代である。色々後継者問題を考えた時にも、やはり少ない管理で低コストで搾る。これが将来の方向ではないかと思えます。

それから、もう一つの違う点は、肉値が高いからどんどん回転すれば、改良も早くなって大変よろしいということもありますが、やはりある程度牛群が揃って来れば耐用年数の延長、まあ孕みもんが高くなってますから、そういうことを考えましても、お三方がおっしゃった耐用年数の延長、これも今、一部の路線よりに対して一つ考えて良いんじゃないかと思えます。

それで一応そういう方向が提起されたと思うんですが、それについて色々ご意見がありましたら後程聞かさせていただきます。

もう一つコーンサイレージの問題があります。荒木さんの報告にありましたけれど、10,000ヘクタールも減って来ている。給与量を控えるようになったからですが、これの原因には色々あります。しかし、十勝のようなかなり土地面積に制約のあるところでは、コーンはこれからもやはり基幹飼料として残っていくと思うんですが、ややもすればコーンサイレージが横にやられるような感じを多々色んなところで聞くわけですね。これについて、どう考えたらいいか、これも恐らく後数年したら十勝もサイロなり、機械なりの更新の時代に入って来ます。そうしたときに酪農家がどういう方向に動いて行くか、そのときの購入飼料価格も当然影響するでしょう。それについて我々の指導者の一定の方向をもっておく必要



勝見登氏



があると思います。これについて、どなたかご意見がございましたら出して戴きたいと思います。

最初に私が、少なくとも土地結合型で、収益性の高い家族経営を展開するんだということを前提にしましたときに、先程のような方向でいろんなことがあります。抜けてる点もあります。それらも含めてご意見をお伺いしたいと思います。どなたかございませんか。

それでは、また後で出して戴くことにしまして、トウモロコシ問題、今、多いときに比べて10,000ヘクタールも減ってますが、そのかわり、早生品種がかなり増えて来ています。まあ、これはこれで方向としては良いと思うんですけども、どうもトウモロコシは伸び悩んでいる。どなたか、特に十勝の方で、ちょっと意見を欲しいんですが、湯藤専技さん、すみませんが一つ、一番中心地の十勝の動きなり、どう考えたら良いか、お願いしたいんですが。

(湯藤氏) 私、十勝のトウモロコシの作付けを調べてみたんですが、十勝においてもやっぱり若干減っているような傾向にございます。ここ数年そんなにひどい天候の年もなかったということで、今、萬田さんが、ちょっと言われましたけれども、十勝の早生型という形がですね、少し早生の晩あたりに増えて来てて、地域性の問題でも十勝の沿岸、山麓、それから中央地帯とあるわけです。けれども、熟期の遅い方が沿岸地帯や山麓地帯に入って来ていて、今年(昭和63年)は非常に天気が悪かったわけで、そういう結果がもろに出まして、熟期の不十分な高水分のコーンサイレージが出来たというのが心配される所です。ちょっと余分なこと言いましたけれども、十勝は、やはり面積的に問題がございまして、コーンがやっぱり主体になる粗飼料の一つだと思います。しかし今、新得畜試で非常に先進的に研究していますが、これとグラスサイレージの組み合わせということを十勝としてはメインにしていくべきではないか。それで、やはり乾草というのが、どうも今一つ品質的にきちっとしたものが出来ない。ということがありますから、こちらの方で出来ればグラスサイレージの方に乗り換えて行って、グラスサイレージとコーンという組み合わせ、これはコーンの持っている澱粉とグラスサイレージの持っている繊維という感じで、組み合わせとしても非常によろしいのではないかと考えております。

(萬田座長) そうですか。十勝ではそういう形の技術の方向を追求した方が良いだろうというご意見でございました。これは非常に地域性がありますから、先ほどの荒木先生の報告のように、根釧等は冷害との影響が、まだ非常に大きいですから、やはり地域にも合うような品種の開発も必要かと思えます。そういう地域でのコーンの追求をどう見られてるか、品種改良によって米だって寒いところで作れるのではないかと、コーンだって作れるというのは、技術者としたら当然追求したいところです。それについてその辺を経営的サイドから回っておられます荒木さんから、ご意見ございましたら。

(荒木氏) 経済サイドから見ますとですね、私、3年ぐらい前にこのコスト計算をちょっとやってみたんですけども、十勝みたいに条件の良いところだと、コーン、グラス、まあグラスもちょっと若干高めにつくんですけども、3年前ぐらいでは配合飼料に太刀打ち出来るような状況だったと思います。ところが、今みたいに円高になってきますと高く付いて、ちょっとよわい感じがします。十勝でその水準ですから、根釧に行きますと収量が当然低いですから、経営サイドから言いますと、不利じゃないか

と思います。昔は畑作をやっていたところですね。で、常習的に冷害にあって、それから酪農に切り替えた地帯ですから、そこで尚且つ、デントーンを作っていくということには時代に逆行するんじゃないかという気がします。やはり草を主体に酪農経営を展開すべきじゃないかという気がします。

(萬田座長) それで時間も迫ってきましたので、これから最後の詰めに入ります。ここで大先輩の町村さんに質問が参っております。国際化時代の酪農として、我々は今何をなすべきとお考えでしょうかと、事務局長の篠原さんからの質問です。

(町村氏) 確かに酪農はですね、国際化してしましても生産原価は農業の中で、私は酪農が強いと思っています。もうアメリカの農家が大体、農家の手取りがキロ 40 円ぐらいですか、カナダで大体 50 円ぐらい、北海道ですと原料乳地帯で 80 円切っているんじゃないかと思うんです。けれども、まあ、他の作物から見ましたら強いと思うんです。やはり北海道でだしている先の、酪農振興審議会の答申のですね。現在 7,600 kg を昭和 70 年までに 7,800 kg にしようという方向です。それから一戸当たり飼養頭数も現在の 48.6 頭を、70 年には 60.7 頭までもって行こうという計画があるわけです。私は、酪農家の戸数が 16,800 戸から 15,000 戸になるだろうと言われていますが、現在の規模を拡大して 60 頭ぐらいの酪農を、現実にやれる経営を確立して戴きたい。そうすることによって農機具の償却費も違うでしょうし、労力的に負荷がかかるとは思われないように思うんです。そういう点で今、萬田先生が非常に良い点を指摘されてましたが、我々酪農家のサイドから見まして、やはり自分の経営を過信しすぎてはいけないということを感じています。やはり指導者と酪農家が一体になって、これからの経営を持ちつ持たれつして戴きたいと思います。

それから、もう一つは、やはり円高メリットの恩恵をもっと農家に与えて貰いたいと思うんです。昔、1 ドル 360 円の時代から見ましたら 3 分の 1 になっているわけですね。それでいて、農機具が 3 分の 1 になっているかといいますと、それこそ、2、3 割しか下がっていない。そういう点は我々農民の力だけでは出来ないけれども、やはりメーカー、それから政治力も必要かもしれません。そういう点で我々をもっともっと側面から援助して戴きたい。

現在、1 人 1 日 100 cc しか、平均で、牛乳は飲まれてない。ちょっと消費が伸びたら、もう牛乳が足りないと言ってバターを 4,000 トン輸入とか、あるいは乳製品を 7,000 トン輸入しなきゃいけないという。そういう農政を改めて戴きたい。もっともっと酪農家が胸をいためてですね。本当に昨年春まで、生産調整で大事な牛乳を捨てたり、あるいは乳牛を淘汰しなきゃいけなかったという、そういう矛盾を無くす農政を一つ確立して戴きたいと思っております。何か勝手なことでしたけれど。

(萬田座長) 町村さんには、農政を通したところまでのいろんな今後の方向についてもご意見を戴きました。ここで敢えて取りまとめはしませんが、大きな方向として我々自身も受け止めておく必要があると思います。

時間も迫ってきましたので、ここで、一応いま私が感じていることを話しまして終わりにしたいと思います。



最近の牛はですね。ある著名な先生が、近代牛の胃袋が体積の18%に縮んでしまって豚になってきていると。昔の牛は30%も胃袋があったと、いうことをある雑誌で私は目にしました。これはどういうことを、その先生は指摘しているかという、我々当面の収益性の高い経営を追求している人間からいけば何か遠い国のような話ですけども、たまにはこういうことも考えておく必要があるので紹介します。それは、反芻家畜である牛は人間の餌と競合しない平和産業動物なんである。それを人間は生産性至上主義のためにどんどん改良したというよりも、そういう餌を食わせて胃袋ちっちゃくして、エネルギー濃度の高い餌をぐいぐい押し込んでいくようになった。その結果どういう牛になったかという、確かに乳量も増え、肉もたくさん作ってくれるということで、良いんですけども、そういう反芻家畜の技術の追求が将来、我々にどういうことをもたらすであろうかということを行っているわけです。私はそれをそのまま素直に受け取るつもりはないですが、今日、お3人の方の話のなかで育成方式を聞いていると、成程ああいいう戸外飼育で粗飼料不断給与体制で胃袋を作り、近代乳牛の欠陥を無くすために胃袋をでっかくしている。でっかくすればたらふく食べれるということを実践しておられる。

さて、その次が問題です。その先生いわく、昔の牛の胃袋がでっかいのは悪い粗飼料を食べていたからだ。だから胃袋を大きくして必要な栄養素を摂取するために、たくさん食わせたわけです。

今日の事例を聞いていると、共通していると思うんです。今日の事例では大きな胃袋を育成して、親になったら良質のサイレージをたくさん食わせる。成程これは近代牛の欠点を克服するたいへんおもしろい方法であるということで非常に参考になったわけです。

この方向はですね。これから、内地酪農とはちがう北海道酪農が追求する道ではないだろうかと思います。

勝見さんの牛乳を、この間筑波の畜産試験場の牛乳専門の方にお送りしまして品質を調べたんです。向こうの茨城県あたりではちょうど3月、4月になると生大豆臭の匂いのミルクがでて問題になる。それに対して北海道の牛乳はおいしいから、ちょっとどっかのサンプルを送ってくれと言われたもんですか

ら、十勝の代表的な牛乳を送るよりも勝見さんみたいなグラスサイレージをいっぱい食わせている牛乳が茨城の牛乳と比較してどうなんだろうかということで、第1回発送してみたんです。そうすると、その先生からデータが返って来て、乳蛋白の大部分はカゼインですが、そのカゼイン率が問題です。残りの乳蛋白は乳清蛋白ですね。カゼイン率は勝見牧場のは非常に高い。茨城の牛乳は低い。これはどういうことをいっているかということ、獣医の方もおられますが、乳房炎なり、そういう病気になったときに乳清蛋白が増えるわけです。要するに健康な牛でない健康な牛乳はできません。勝見さんの牛乳はカゼイン率が高く、脂肪酸組成やアミノ酸バランスもよく、本来の牛乳であると評価されたわけです。1回ですから、ずっとこれから長期的に調査しますけども、そういうところまでも牛乳品質問題が追求されはじめています。

そしてより健康な乳量の高い牛ということは、おそらく府県からも求められてくると思うんです。そういうミルクを作る有利な条件に北海道はあると思います。そして、それは粗飼料の不断給与体制にあるといえるのですが、粗飼料というのは言い方が悪いですから、いわゆる自給飼料の不断給与体制、これを確立していく一つの方向を示していると思います。

ですから、やはり日本の消費者に向けた高品質牛乳生産、それも土地から搾っていく、そして経営的にも収益性の高い家族経営を目指すとき、将来どのくらいの頭数にしたら良いとか、経営サイドからも様々な角度から検討を加えながら、いつの機会にか、またのシンポジウムでつめれば良いと思います。しかし、今はなかなか経営を拡大するような条件にないです。一部収益性の高い方がどんどん土地を購入して広がっていきますけれども、まだまだ酪農家のなかには先行き不安を感じておられる方がいます。ですから私は、やはり基本的には今の路線の中で出来るだけ収益性を追求して行くということが大切だと思います。

次にフリーストールなり、パーラーなり、これをどう考えて行くか。頭数が増えた時の省力問題、これについては、今日はなかなかそこまで論議が及びませんでした。次の機会に、規模拡大問題についてつなげて行きたいと思います。

以上、非常にざっぱくですが、今日のシンポジウムを終わらせて頂きます。どうもありがとうございました。